

うもたて給へ。義経はもとの櫓で候はん（平家物語・十一・逆櫓）

○若イ者モ高官ニアルホドニ是ニ依テ叔伯ハカイサマニシタゾ（古活字版毛詩抄・四）

以上考察してきたように、マッカイサマナの形が定着し、多用されるに至った結果、「マツカイサマ」という語構成の意識が弱まって、「マッカイ+サマ」という意識で受け取られるようになり、そのため、接尾語的なサマを脱落させる場合が生じたものと思われる。

このようにして生じたマッカイナ<=正反対な、逆な、まったく異なる>は、語形の類似から「真っ赤いな」として受け取られるようになり、「マッカイナ贋物」は、やがて「真っ赤な贋物」の形で定着するに至ったものであろう。

ちなみに、このように見てくると、「赤の他人」の場合も、その成立については、やはり同様の観点から考察する必要があるであろう。すなわち、

○兵庫の頭、坂田の公平には顔まっかいな他人にて」（雪女五枚羽子板・もんさく系図<1705年>（日本国語大辞典所引）

のような例の存在は、この場合もやはり、本来赤色とは無関係であったのではないかという推測を可能にするものであろう。

以上、語史考証としてはまったく不十分なものであり、確定的なことを言うためには、さらに資料の収集を続けなければならないが、一つの仮説として提示してみた。言語の変化には、さまざまな要因がからみあってはたらいっており、一つの語を取り上げても、限りなく問題が広がっていくことを痛感するのである。個々の現象の追求・解明を、国語史の大きな流れの中にかに位置づけていくか、道は遠い。

（注）小西甚一「鴨の声ほのかに白し一芭蕉句分析批評の試み一」（文学31巻8号，昭和38）による。

（1975，12，25）

ある日の対談

森 本 国 臣

小先生「先生、今年は各地で大雪のようですが、スキーは如何ですか。」

大先生「今年はダメじゃ。骨折した足がまだよく直っておらん。足の中にまだ金属の棒が埋め込んである。」

小先生「それはどうもお気の毒なことです。先生のようなベテランが骨折とは信じられませんでしたよ。」

大先生「油断大敵じゃ」

小先生「先生は結局六か月御入院だったわけですね、その間にずいぶん読書なさったと聞いておりますが。」

大先生「いや、たいして読まなかったよ。読書家の君とは違うよ。大体ね、本というものは信じ過ぎると大変なことになる。本に書いてあるから、これはこうだと主張するのが君のいつもの論法だが。」

小先生「それについては自戒していま

す。ショーペンハウアーも警告していますよ。」

大先生「ほう、また始まった。」

小先生「まあ、そういじめないで下さい。」

大先生「これは真面目な話だ。文字の使用、さらに後のグーテンベルクの活版印刷術が文化を発展させてきたのは事実だ。世界中の本を集めれば巨大な知識の山ができてあがる。しかし、こんなものはバベルの塔だよ。」

小先生「めちゃくちゃを仰っては困ります。図書館の数と蔵書数はその国の文化のパロメーターですから。」

大先生「君、そんなつまらぬ常識にとらわれてはいかん。ワシがここで考察せんとするのは書物の根本問題だ。書物のおかげで人間は多少利口になったかもしれぬが、その反面、書物のおかげで戦争を始めたと言えなくもない。ヨーロッパでは聖書のおかげで宗教戦争が起ったのだ。」

小先生「暴論ですね。」

大先生「暴論なものか。話を一步進めるが驚いてはいけない。教育というものも人間を利口にしが、反面どれだけ人間を墮落させてきたか知れない。ここで言う教育とは学校教育のことだ。学校教育には良いのと悪いのとあると言う奴がいるかもしれぬが、ワシに言わせれば、良い学校教育というものは存在しない。」

小先生「大胆な説ですね。」

大先生「人間が人間を導く。これはできないことだ。学校という狭い温室の中でモヤシが沢山のモヤシをこしらえ上げる。盲人が盲人を導くことはできぬ、と聖書にもある。」

小先生「先生も聖書を典拠にされるのですね。聖書の権威は偉大なものですね。」

大先生「学校教育によって押しつぶされた人々は無数と言ってよい。成績が悪いために辛い思いをした人々は数知れない。学校のおかげで無意味な涙が流れたのだ。」

小先生「相当センチメンタルですね。」

大先生「そうさ、ワシもいろいろな意味で被害者の一人だからな。」

小先生「坊主憎くけりゃ袈裟まで憎い。」

大先生「君、何か学校教育に替わる妙案はないものかね。」

小先生「たしかハーバート・リードが芸術による教育ということ唱えております。彼以外にも先人がいます。もちろん知育教育偏重を批判し情操教育を重視しているわけで、学校そのものを否定しているのではなかったと思います。」

大先生「それではコベルニクスの転回にはならないな。ワシは学校という温室栽培がいかんと言っておるのだ。学校では生きる喜びを教えるというよりも、ただ苦しみを味わわせていると言っても過言ではない。学校を中心に生活していると、人間は学校人間となってくる。」

小先生「先生御得意の造語ですね。学校人間が学校人間を造り出すという悪循環ですか。」

大先生「隣の国では学校人間という奇形を造らないための試みが行われている。生きた社会に触れることによって生きることを学ぶことなのだ。」

小先生「そうは言っても学校を廃止するわけにもいかず、困りましたね。」

大先生「ところで君は学校の中の空気が外部の生きた社会の空気とかなり違うことに気がつかないかね。」

小先生「ずいぶん暖かいような気がします。たぶん暖房のせいでしょう。」

大先生「どうもワシは酸素が少ないので

はないかと思う。何となく息苦しい。」

小先生「病院の空気は如何でしたか。」

大先生「それは君、実に厭しいものだよ。ワンの入院している間にも五、六人死んだよ。内科の患者だったが。」

小先生「病院には『生き死に』があるが、学校にはない。」

大先生「君も時には気のきいたことを言うね。入院するといろいろなことを学ぶよ。病院は一種の教育機関と言ってもよいだろう。医者と看護婦は別格だが、患者たちは誰が先生で誰が生徒というわけではな

く、お互いが教え合い励まし合う。」

小先生「目的が実にはっきりしていますね。お互いの肉体と精神の健康を回復すること。」

大先生「そう、そうだよ、書物からは決して得られないことを学ぶのだ。生きた社会に接することは真の学問の始まりと言える。」

小先生「それじゃあ、さっそく私もスキーへ出かけ、骨折して入院することにします。」 (1976.2.1)

トロイアの女

高橋正俊

アテネ民主政の衆愚化現象を示すものとして、様々な事件が挙げられる。政治的に重要な事例は、ペロポネソス戦争においてアテネ側がやや不利になりかけ、頭に血が昇った時期に多発した。例えば、B.C. 428に起ったミュティレネの離反鎮圧の処理において典型的である。アテネ民会は、クレオンの煽動にのせられ、ミュティレネ市民は全員死刑・婦女子は奴隷とするとの決議をなしておきながら、一晩頭を冷やして考えてみて後悔し、翌日民会を開きなおしたのである。こんどは穏健派が勝ちを制し、危い所で市民全員処刑という最悪の事態を回避できたのであった。¹⁾これは、民主政にも抑制装置(権力分立・二院制等)がやはり必要であることを説明する時のマクラに使う話であるが、政治的に重要事件とは言えぬけれども、もっと酷い例がある。

すなわち、B.C. 416年メーロス島に起っ

た事件である。それは、アテネが中立の立場をとっていた小国メーロスに対し、自らの支配下に入る事を強要し、拒絶されるや攻撃をかけ城をおとし「逮捕されたメーロス人成年男子全員を死刑に処し、婦女子供らを奴隷にした」というのである²⁾。これを記した史家ツキディデスは、このようなアテネの行動の動機・根拠を空白のままに残している。先のミュティレネの場合は、従来の同盟者が謀叛を起こしたわけであるから、その処罰の当・不当は別として、根拠は明白である。しかるにメーロスの場合は、話は全く別である。アテネの言いぶんは、史家の述べる所によれば、強者の論理にかかっている。曰く、「この世で通ずる理屈によれば正義か否かは彼我の勢力伯仲のとき定めがつくもの。強者と弱者の間では、強きがいかに大をなし得、弱きがいかに小なる譲歩をもって脱し得るか、その可